

「流れる」ような授業を

重松 靖 Shigematsu Yasushi

(東京都国分寺市立第二中学校)

1 はじめに

英語科の教師は、脚本家であり演出家、大道具・小道具係であり演技者だと思っている。私は、授業を1つのショーとして考え、どうすれば生徒を引きつけ、飽きさせることなく、伝えたいことを伝えられるかを考えるのが好きだった。今回は NEW CROWN の GET を使った「ショー」を流れるように演出するにはどうしたらよいか、紹介したい。

2 PPP, Input - Intake - Output

授業構成を考える上で、PPP, Input-Intake-Output というプロセスは大切にしたい。

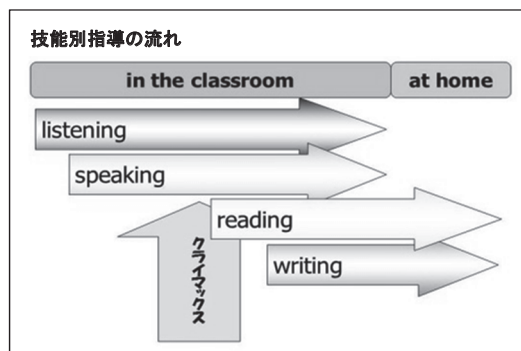
PPP の3つのPは、Presentation (提示), Practice (練習), Production (表現, 活用)であり、指導手順を示す。これは、目標文を板書し説明する(提示)、目標文をリピートさせたり練習問題を解かせたりする(練習)、最後に和文英訳で英文を書かせる(表現)という流れで行う文法訳読式の授業にも当てはまる。しかし、これでは言語を使いこなす力が身につくはずがない。コミュニケーションを意識したPPPでなければならない。

そこで押さえないのが Input - Intake - Output というプロセスである。英語を表出(output)するには、大量の英語を聞いたり読んだり(input)して、文構造を内在化(intake)しなければならない、というものである。inputする英語は理解できるレベルよりほんの少し難しいもので、実際に英語を使うことによってintakeされると言われている。なお、intakeされる量はinputする量の2~3割程度だそう。つまり、outputするには大量のinputが必要ということになる。

3 音声から文字へ

では、具体的な授業構成を考えてみよう。まずその授業のクライマックス、山場となる言語活動を考える。目標となる言語材料を使い、生徒がいきいきと、目を輝かせて行う言語活動である。私は、授業では学校でしかできないことを重点的に行うべきだと思っている。「読むこと」や「書くこと」は自宅でもある程度できるが、「聞くこと」や「話すこと」は難しい。そこで、授業で「話すこと」「聞くこと」を中心に行うとなると、当然山場の言語活動も「話すこと」「聞くこと」が多くなる。

そのクライマックスに向かって、スモールステップで少しずつ少しずつ自信をつけさせ、盛り上げていく。大切なことは音声で攻めること。文字を読ませるのは必要最少限にとどめ、文法の説明などはしない。長々とした解説や板書をノートに写させることは、生徒を一気に「学習モード」にしてしまう。「流れる」ような授業にするためには、音声主体の「活動モード」を維持しなければならない。



具体的な流れは以下のようなになる。

・ウォームアップ

英語は体育や音楽と同じ実技教科である。体育の

準備運動、音楽の発声練習同様、英語の授業でもウォームアップは不可欠である。英語の歌、チャット、ビンゴ等が考えられるが、生徒の状況に応じて工夫したい。あくまで言語活動のウォームアップであり、「学習モード」にしないことが大切である。

・導入

落語でいう「まくら」、漫才でいう「つかみ」と同じく、授業の中で「導入」は最も大切な部分の1つである。自然な場面・状況を設定し、目標となる文・表現を数多く聞かせ、生徒に意味を予測させる。場合によっては、キーになる表現をフラッシュカードに書き、提示してもよいが、細かな説明はしない。生徒とのQ&Aを繰り返しながら意味を確認し、自然な流れの中でドリルに移行する。「さあ、では練習しましょう。Let's practice!」とは言わずにドリルに進みたい。

・ドリル

ドリルには mechanical drill, meaningful drill, communicative drill の3段階がある。mechanical drill はあまり意味を理解しなくてもできる機械的なドリルである。単純な繰り返しや、文中の単語を入れ替える substitution drill などの文型練習である。communicative language teaching が導入され文型練習の弊害が指摘されたが、それは mechanical drill だけで終わってしまうことが問題なのであり、口慣らしをさせるためには重要なドリルである。

mechanical drill に続けてよく行われるのが meaningful drill である。意味の理解を伴い、目標となる英文を聞いたり、話したりする必然性がある。例えば、information gap を埋める活動などがあげられる。

meaningful drill は、meaningful とはいえ、基本文を繰り返し聞いたり、話したりするドリルであるため、使用する言語が制限され、非日常的な場面設定となってしまうことが多い。そこで、ドリルの最終段階として実際のコミュニケーションの場面を想定した communicative drill が行われる。しかし、場面設定が難しく、また時間的にも余裕がないことが多かったため、私は Lesson の出口の活動として行うことが多かった。

・本文の内容理解

ここでようやく文字が中心となる。しかし、ここでも「音声から文字」を意識して進めたい。

まず、閉本したままピクチャーカードなどを使って oral introduction を行う。教師が一方的に話すだけでなく、生徒との Q&A を織り交ぜながら本文の概要を把握する。

次に、教科書を開き、CD や教師の範読を聞きながら文字で確認する。細かい内容についての問いを出しながら数回黙読させる。新出語彙の意味を予測させる活動もぜひ取り入れるとよい。最後に目標文や、重要な表現・文法事項などにアンダーラインを引かせる。そうすれば、生徒が自宅で復習したり試験勉強をするときに、大切な部分を確認するのに役立つ。私は、アンダーラインを引いた文や表現は必ず試験に出題する、と公約していた。

・新出語彙の確認

音読する準備として新出語彙の確認をする。内容理解の段階で意味の予測と確認は済ませてあるので、ここでは発音の指導と余裕があれば綴りの練習を行う。フラッシュカードを使い全体一人を織り交ぜながらテンポよく行う。

・音読

内容が十分理解できてから音読に入る。英文の意味内容を考え、大切な部分のピッチを上げたり、気持ちを込めて読んだりできるようにする。大切な文は全体で何度も繰り返させ、さらに個人でも読ませるなど、メリハリをつける。chorus reading, buzz reading, individual reading, pair reading, shadowing などを取り入れ、テンポよく進める。

・まとめ

文法の整理をしながら、学習した表現を使って自己表現をさせる。「教科書本文を3回写す」、「5回音読する」は、誰にでもできるお決まりの宿題である。

4 おわりに

NEW CROWN の GET を使った授業の流れを紹介した。2時間程度要するが、常に「山場を考え、そこに向かって盛り上げていく」工夫をしたい。何より、教えていて楽しい！と思える授業をしてほしいと思う。教師が楽しければ、生徒も楽しい！